
アंकと進化と狂喜の微笑

バディムの人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アंकと進化と狂喜の微笑

【Nコード】

N0153V

【作者名】

バディムの人

【あらすじ】

オーズに敗退したアंक（ロスト）は進化を願う。そのために彼が目をつけたのはカザリのコアメダルだった。

(前書き)

アंक (ロスト) 追悼。というわけでもないですが、書いてみました。カザリがひどい目に会いますのでカザリファンは注意を。

ドクター真木の館。今やグリードという怪物の巣と化している。その館で、一体の怪物が危機を迎えていた。安全だったはずの巣の中で。

「思った以上に弱いね、カザリ」

カザリは何が起きたか分からなかった。突然もう一人のアंक……嫌、もう彼が前のアंकを取り込んでいる。彼がアंकだ。彼が自分に攻撃をかけてきたのだ。……仲間のはずの自分に。

「どういうつもりだい、アंक？ 今ならまだ許してあげるよ……」

「許す？ 何言ってるの。力は僕のほうが上だよ」

アंकにカザリを逃がす気は無いようだ。カザリはなんとかこの状況を抜け出す方法を考えようとした。

「一体何が目的だ……」

「カザリも言っていたよね。自分はもっと進化するって。僕も進化したくなったよ」

「進化だって」

確かにカザリは進化しようとした。そのためにコアメダルを集めていた。前のアंकと同じように。だが、オーズとアंकのコンビは予想以上に手強かった。いつまでもメダルは集まらず、逆にメダルを奪われる始末。カザリは戦略を変えることにした。わざとメスールとガメルのコアメダルをウヴァに渡した。ウヴァは自分の望み通りメスールとガメルを復活させた。その後、目障りなウヴァは始末

した。前のアंकと同じく、自分に歯向かうグリードなど邪魔なだけだ。カザリは労せずして四体のグリードを仲間にすることに成功した。その一体に襲われることになるとは。

「君が進化するつもりなのかい」

「そうさ。あんたのメダルを使ってね」

「オーズを倒すためかい」

アंकはオーズを倒しに向かった。だが、オーズは紫のメダルのパワーを全開にし、アंकを圧倒した。アंकは後一步のところで敗れるところだった。人間を見つけないければ。アंकはその人間がオーズの知り合いであることに気づいた。前のアंकの記憶からわかった。アंकは僅かな望みに賭け、炎を放った。望みは叶った。オーズは人間をかばった。その隙にアंकは逃げ出した。

もし落下した場所が人間と離れた位置だったらアंकは敗れていただろう。それほどにオーズの力は……紫のメダルの力は強大だった。まだアंकのコアメダルはオーズが持っている。完全体になるためには、コアメダルが必要だ。

そこでアंकがオーズを倒すための手段として思い付いたのが、他人のコアメダルによる強化だったのだろう。

「僕たちと協力したほうがオーズに勝てる確率はあがるよ」

「カザリは紫のメダルのオーズに傷一つつけられなかったじゃないか。あれからあんたの持つメダルが増えたわけでもない。僕が進化したほうが効率いいよ」

アंकは賢い。説得はできそうにない。このままではやられてしまう。

「私たちのメダルも奪うつもりなのかしら」

少女が冷ややかに尋ねる。メズールだ。側にはガメルと真木もいる。

「……嫌、あんたたちのメダルはまた別の機会さ。『道が別れた時にでもね』」

道が別れた時。それは真木が言った言葉。彼は世界を終わらせることを自分の使命としている。そのためにグリードを暴走させるつもりでいる。カザリもそれを知った上で彼を仲間にした。

メズールもその事は覚えているだろう。彼女は一度真木を見た後、またアंकに尋ねる。

「なら、いずれは私たちのメダルを奪う気なのね」

「ああ。どうする。三人仲良く僕と戦うかい」

「やめておくわ」

メズールはあっさり決断した。

「メズール……君はバラバラになりたくないんじゃないのか」

「そうよ、カザリ。だから今は戦わない。今の私たちが協力しても彼に勝てそうに無いからね」

カザリがアंकに勝つ可能性。その一つが失われた。メズールが協力しないならガメルも協力しないだろう。彼はのんきにお菓子を食べている。カザリには興味がないかのようだ。

「それにお前は一度私とガメルを裏切った。それを忘れたのかしら」

カザリはメズールを裏切り、彼女とガメルを合体させた。その時彼女はバラバラにされたことを今でも根に持っている。もともとカザ

りを助ける義理は彼女にない。

「ドクター。アंकはあんたの言うことを聞かないかもしれないよ」

「それがどうしたのですか？私の目的は世界の破滅。完全体となった彼がやってくれるなら構いません」

真木も自分を助ける気はなさそうだ。自分一人で助からねばならない。なんとしても逃げねば。

「逃げることは許しません」

真木は燭台にセルメダルを投げる。燭台に投入口が現れ、メダルを飲み込む。

紫色の翼竜、プテラヤミーが燭台より出現した。カザリの逃げ場をふさぐように動く。

「ドクター！何の真似だ！」

「あなたに逃げられては困ります。メダルを回収する手間が増えますからね」

肩に乗せた人形を見ながらドクターは言った。カザリは完全に逃げ場を失った。

「あんたも終わりだねカザリ。しぶとく頑張ったようだけど、これで終わりだ」

「くそ！」

カザリは爪を伸ばし、アंकに襲いかかる。まだこんなところでや

られるわけには行かない。自分は完全体になるのだ。完全になり、この歪んだ世界を脱出する。それをこんなことで終わらせるものか。

「まだわからないのかな、カザリ」

カザリの爪はアंकにかすりさえしない。アंकはカザリの動きを完璧に見切っている。彼はカザリの右腕を左手でつかんだ。

「あんたと僕の力の差が」

アंकは空いた右腕でカザリに炎を放つ。カザリの顔が焼かれる。

「ぐあああ!?!」

カザリは顔を抑える。前が見えないカザリを、アंकは蹴り転がす。

「カザリ、あんたには一つだけ感謝してるよ。あんたがいなかったら僕はオーズにやられていた」

アंकの足音がカザリに近づく。カザリは急いで立ち上がった。

「でも、もう用済みだ」

カザリは風を放とうとした。それより先にアंकはカザリの手を取り、背後に投げ飛ばした。カザリの体が空中に放り出される。完全に無防備だ。

「さようなら」

アंकは足に紫の炎を纏い、飛ぶ。カザリはアंकがキックの体制を取るのを見ていた。もう避けられない。自分が……自分がこんなにあっけなく敗れる？メズールやガメルを裏切り、生き延びた自分が。ウヴァを倒した自分が。こんなにあっけなく？カザリは目の前の脅威は幻なのではないかと思った。グリードが見ないはずの夢。自分はそれを見ているのではないか。そう思ったかった。

だが、痛みは現実だった。一瞬で彼の体は爆発し、バラバラになった。

「さようなら、カザリ。嫌、違ったね」

カザリだったコアメダルを手にはアंकは笑っていた。

「僕らは一緒だ。これからずっと」

アंकはカザリのコアメダルを取り込む。力が増す。新たな力を感じる。これが進化か。

「最高だ、カザリ。アハハ……アハハハハ……！！！」

狂ったようなアंकの笑いが響く。いつまでもいつまでも。アंकは笑っていた。

(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

アंक（ロスト）がカザリの仲間になった時、成長した彼がカザリを倒す展開を期待していました。魔人ブウがバビディを殺したように。その展開が無かった不満からこの小説を書きました。

アंक（ロスト）がプティラに敗れたのは納得しています。

プティラコンボもコアメダルを破壊する威力を見せ、最終フォームっぽくなってきました。今後の活躍も期待できます。

しかし、これで私はアंकが主役の話を三つも投稿したことに。そこまでアंकが好きというわけでもないと思っっているのですが……もっと別の人が主役の話も書きたいですね。

では、ご意見ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0153v/>

アंकと進化と狂喜の微笑

2011年10月8日23時58分発行